

下佐野遺跡調査概報 I

—平成2年度、明光電気地区の調査—

1992年3月

高岡市教育委員会

下佐野遺跡調査概報 I

—平成2年度、明光電気地区の調査—

1992年3月

高岡市教育委員会

序

下佐野遺跡は、昭和38年に発見されて以来、弥生時代終末期を中心とする遺跡として著名であり、富山県史等でも取りあげられ、広く一般に知られてきた遺跡でありました。しかし、現在に至るまで発掘調査を実施される機会がなく、その具体的な内容は不明でした。この度「明光電気」の店舗建設が行われることになり、発掘調査を実施しました。狭い面積の調査ではありましたが、予想以上の成果を挙げることができ、当地区の歴史の解明に、大きく寄与することになりました。

当遺跡は、千保川と和田川との間の微高地に立地しています。西側を北流する和田川を挟んで、弥生時代中期の遺跡として著名な石塚遺跡と対峙する形になっています。いずれも弥生時代から中世に至るまで長期に亘り営まれた大集落であり、両者の関係も興味を引きます。

今回の調査に当たり、御協力頂きました鈴木巖氏、関口順三氏、別所利昭氏、吉田健司氏をはじめ、地元の皆様、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月31日

高岡市教育委員会

教育長 篠 島 满

例　　言

1. 本書は、下佐野遺跡における発掘調査及び試掘調査の概要報告書である。
2. 当調査は、高岡市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査地区は以下のとおりである。
 - (1) 名称、「明光電気地区」
 - (2) 地番、高岡市佐野1074-3
 - (3) 調査期間
平成2年4月16日～5月10日
4. 試掘調査地区は以下のとおりである。
 - (1) 名称、「明光電気駐車場地区」
 - (2) 地番、高岡市佐野1074-4
 - (3) 調査期間
平成3年5月27日～5月29日
5. 当調査は、高岡市教育委員会社会教育課文化係主任山口辰一が担当し、社会教育課長佐野嘉朗、文化係長人石茂が統括した。
6. 調査及び報告書の作成に当たって、以下の各氏より、御教示を得た。(順不同、敬称略)
安念幹倫(富山県文化振興財団)
宇野隆夫(富山大学)
小島俊彰(市文化財審議委員)
酒井重洋(富山県埋蔵文化財センター)
西井龍儀(富山考古学会)
前川要(富山大学)
宮田進一(富山県文化振興財団)
7. 本書の執筆は、山口が担当した。

下佐野遺跡調査概報 I

目 次

序

例言

目次

I 序 説	1
II 遺 構	5
1. 井戸址	5
2. 土坑	8
3. 溝	9
III 遺 物	10
1. 土器類	10
2. 木製品	11
IV 結 語	12

図 面 目 次

図面 1 遺物実測図 土器類

図面 2 遺物実測図 土器類

図面 3 遺物実測図 木製品

図面 4 遺物実測図 木製品

図面 5 遺物実測図 木製品

図面 6 遺物実測図 木製品

図 版 目 次

図版1 遺構	1. 建物地区全景 (南西) 2. 建物地区全景 (北西)	図版7 遺構	1. S E05全景 (南西) 2. S E05全景 (北西)
図版2 遺構	1. 駐車場地区全景 (南西) 2. S E01全景 (東)	図版8 遺構	1. S D01全景 (南西) 2. S D01全景 (北西)
図版3 遺構	1. S E01全景 (北東) 2. S E01全景 (北東)	図版9 遺物	木製品
図版4 遺構	1. S E02全景 (南西) 2. S E06・07全景 (東)	図版10 遺物	木製品
図版5 遺構	1. S E03全景 (南西) 2. S E03全景 (南東)	図版11 遺物	木製品
図版6 遺構	1. S E04全景 (西) 2. S E04全景 (北東)	図版12 遺物	木製品
		図版13 遺物	木製品
		図版14 遺物	木製品

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1/5万)	1	第4図 S E01実測図(1/30).....	6
第2図 調査地区位置図(1/5,000)	2	第5図 S E03実測図(1/30).....	6
第3図 遺構図(1/200)	3	第6図 S E05実測図(1/30).....	6

調査参加者名簿

発掘 上田順子, 岡島敏雄, 島田英子, 高田えみ子, 名村秀夫, 畠口順, 船木悦子, 前田武蔵,
松井弘子, 水外一郎, 宮下真知子, 吉久恵子

整理 五十里文子, 稲場由美子, 上田順子, 太田智子, 岡村幸枝, 楠友栄, 沢田優子, 菅谷幸恵,
高田えみ子, 高田ききょう, 船木悦子, 松井弘子, 三島幸代, 宮下真知子

I 序 説

遺跡概観

当「下佐野遺跡」は、高岡市街地の南西郊、J R高岡駅の南西側約2.5kmに位置する。遺跡の西側は泉ヶ丘団地である。すなわち、泉ヶ丘団地の東側一帯が当遺跡である。この付近は、庄川が形成した扇状地の前面にあたり、東側には千保川が、西側には和田川が北流している。千保川は17世紀末まで、庄川の本流であった。また、和田川は庄川扇状地の湧水を水源とする河川の一つである。この両河川に挟まれた微高地に当遺跡が立地している。

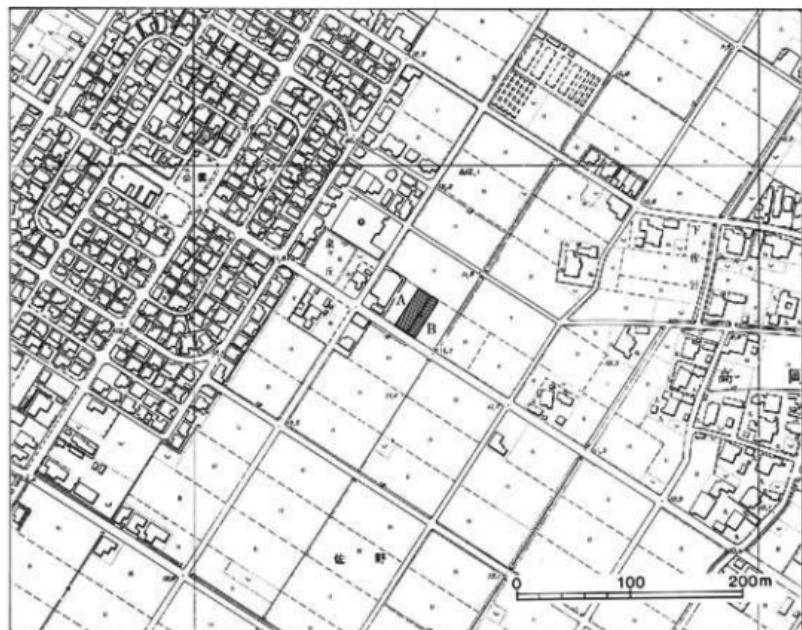


第1図 遺跡位置図 (1/5万)

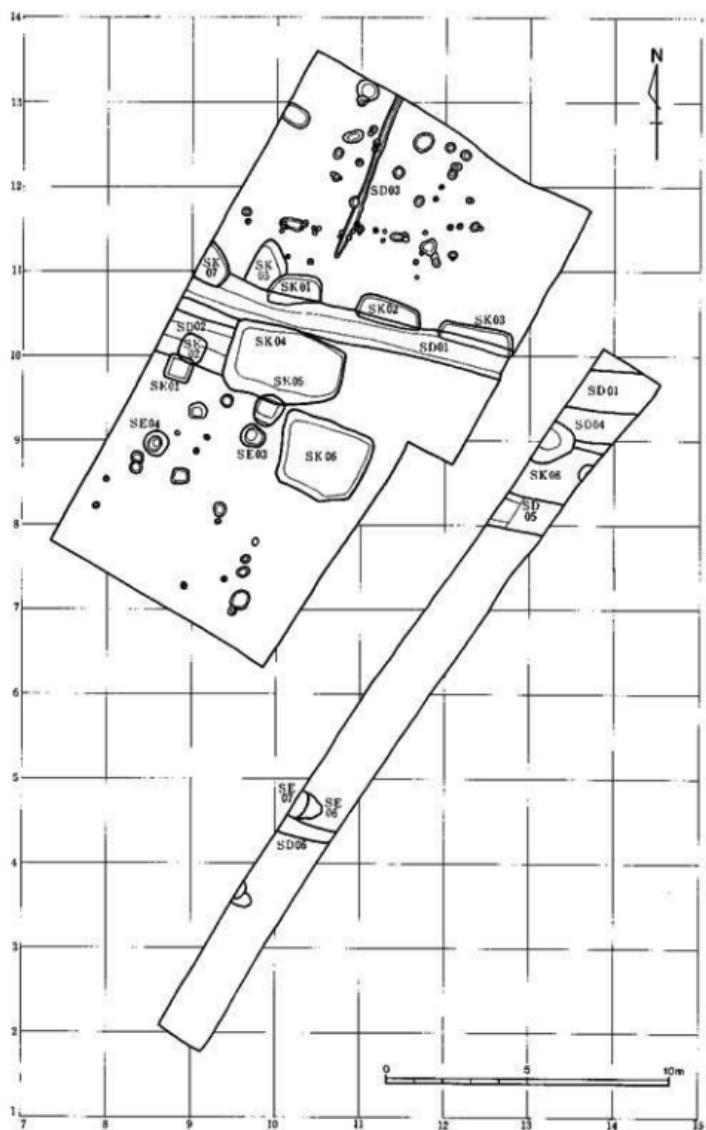
当遺跡は、昭和38年に発見され、その後昭和42年に当遺跡の紹介が行われ、多くの人に知られるに至った。この時点では、昭和39年に当地で実施された区画整理事業の工事に伴って出土した遺物を中心に、当遺跡が、弥生時代後期の遺物や、土師器・須恵器が出土する遺跡として認識されていた。

調査に至る経緯

平成元年11月末、市農業委員会からの照会で、当該地における農地転用と店舗付住宅の建設計画を知った。譲渡人（地主）の別所利昭氏の承諾を得て、12月13日～15日に試掘調査を実施した。この結果、土坑や溝等の遺構が検出され、土師器・須恵器等の遺物が出土した。本調査の必要性がある内容だったので、県教育委員会から取扱いについての指導を得た後、工事関係者、すなわち別所氏、仲介の関口不動産（関口順三氏）、施工の丸孝建設株式会社（吉田健司氏）、施主の株式会社鈴商（鈴木巖氏）との協議をし、本調査実施の了解を得るとともに、現地調査費用の負担の了解も得た。このような経緯で当佐野遺跡の「明光電気地区」の発掘調査を実施するに至った。



第2図 調査地区位置図 (1/5,000) A - 建物地区, B - 駐車場地区



第3図 遺構図 (1/200)

調査の経過

発掘調査は、平成2年4月16日から5月10日まで実施した。実働調査日数は15日である。先ずバックフォーにより表土を除去した後、人力による掘り下げを行った。敷地、すなわち調査対象面積 499m²（幅 12.91m、奥行 38.67m）に対して、210m²の発掘調査を実施した。発掘部分は建物建設予定地部分を中心としたものである。なお、本調査を実施した、当「明光電気地区」を後述する試掘調査地区に対して、「建物地区」と称することにする。

平成3年2月に至り、当地区的東側隣接地が駐車場となることになったので、試掘調査の実施計画を立てた。試掘調査は、平成3年5月27日～30日の3日間行った。この調査は、平成3年度県費補助事業「市内遺跡試掘調査事業」の一環として行ったものである。すでに一部水田面上に盛土がなされていたこともあり、表土除去はバックフォーによるものとした。この調査の対象面積は 358m²（幅9.26m、奥行 38.67m）、試掘調査面積は55m²である。当地区的調査は、幅約2m、長さ29mの試掘坑を設定した形である。なお、本文等において、「駐車場地区」と称したのは、当試掘調査地区のことを指す。

当概報は、平成2年度の発掘調査と平成3年度の試掘調査との結果を合わせて、報告するものである。遺物整理・報告書作成事業は、市費により、平成2年度と平成3年度の2箇年に亘って実施したものである。

検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。

井戸址 7基（S E01～07）；建物地区 5基、駐車場地区 2基

土坑 8基（S K01～08）；建物地区 7基、駐車場地区 1基

溝 6条（S D01～06）；建物地区 5条、駐車場地区 1条

出土遺物

遺物は、古墳時代から中世後期のものが出土している。中世の遺物が中心で、奈良・平安時代の遺物がこれに次ぎ、古墳時代のものは少量である。遺構に伴うものは、すべて中世のものである。遺物の種類は、土器・陶磁器類（土器類と略称）、土製品、木製品である。

1. 土器類；土師器、須恵器、瓦質土器、珠洲、越前、加賀、瀬戸灰釉、天目、青磁。
2. 土製品；土錘（奈良・平安時代のものと推定）。
3. 木製品；主として井戸址から出土したものや、井戸側の部材である。すべて中世のものである。漆器椀、木筒、曲物、折敷、箸、木製部材である。

グリッド

調査地区的グリッドは、発掘調査の時点では、道路や敷地に合わせてこれと直角になるようにした任意のものである。その後、測量を実施し平面直角座標系に合わせた。このため、若干の歪みや誤差が生じていることと考えられるが、図面の方位はこの座標に基づいている。第3図における、X = 7、Y = 1の地点は、原点より、西へ15,312m、北へ80,353mの位置である。

II 遺構

1. 井戸址

S E01

縦板組横棧どめ井戸。S E02の南側で、このS E01に一部切られた形で検出された。

平面は方形であり、内法は68cmに復元できる。井戸の掘り方は、隅丸方形で一辺90cm、深さ98cmを計る。水溜用の特別な施設はなく、井戸側の最下部がそのまま水溜の役割りを果たしている。井戸側は、板材を縦に組んでいるが、南壁と西壁は、それぞれ大型の板材を2個並べている。これは、幅29.5~34.0cm、長さ89.0~102.5cm、厚さ1.6~2.2cmを計る。南壁には横棧が残存しており、南東隅部からは、もう1点原位置から動いた状態での横棧も出土している。また、南壁と西壁の大型板材の裏側には小型の板材があり、同様の小型の板材が東壁からも確認できた。この小型の板材は、幅約12cm、長さ60cm以上、厚さ1cmを計る。東壁と西壁との間の板材間は、68cmである。出土した2点の横棧は、両端に枘（凸枘）を持つもので、縦板を保持する横棧の仕口は明確ではない。北壁はS E02に切られて存在しないが、東壁に大型の板材が認められないことや、大型板材の裏側には小型の板材がある点などより、本来、小型の板材を使用した縦組井戸を修復して、南壁と西壁に大型の板材を2個並べる形態にした井戸であると考えたい。そのため、横棧も本来のものではなく、修復時に一部従来の部材を使用したものと理解したい。

当井戸址の実測図は第4図として示した。井戸側内の埋土を除去するとともに、井戸側の縦板が内側へ少しづつ傾き始めたので、写真や実測は、この状態で取らざるを得なかった。第4図は、実際計った図面を基本としつつも、復元的に図化したものである。

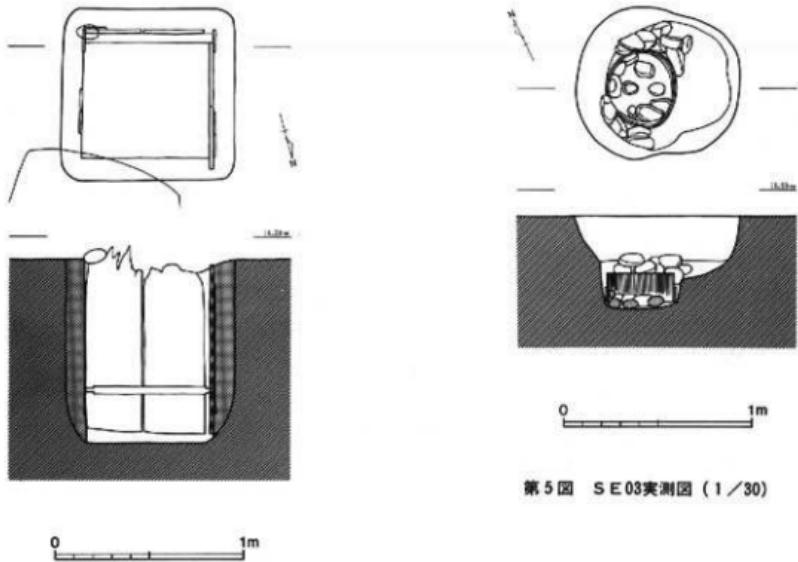
出土遺物の内、図示したものは、土師器皿1点（図面1-118）、曲物底板2点（図面4-208、209）、箸2点（図面3-212、215）である。また、井戸側の部材を示した。縦板4点（図面5-228、229、図面6-230、231）と横棧2点（図面5-232、図面6-233）である。228が南壁東側、229が南壁西側、230が西壁南側、231が西壁北側である。また南壁の横棧は232である。図示した以外では、土師器、須恵器、珠洲の細片である。

S E02

素掘り井戸。S E01の北側で、このS E01を一部切る形で検出された。

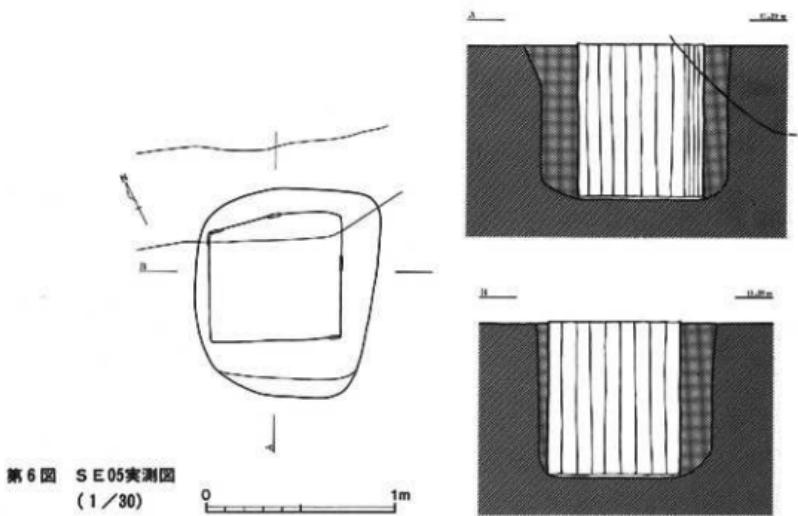
平面形は方形であり、一辺約95cmを計る。深さは140cmでS E01より深いものである。木片が若干出土したが、井壁を保護したと確實に言えるものがなく、素掘り井戸としておく。

出土遺物の内、図示したものは、土師器皿1点（図面1-120）、漆器碗1点（図面3-201）、木筒1点（図面3-202）、折敷1点（図面3-210）、箸2点（図面3-221、222）である。図示した以外では、土師器、須恵器、珠洲の細片、青磁壺類の破片、曲物側板の破片である。



第5図 SE 03実測図 (1/30)

第4図 SE 01実測図 (1/30)



第6図 SE 05実測図

(1/30)

0 1m

S E 03

曲物積上げ井戸。S E 05の南側で検出された。

曲物積上げ井戸としたが、曲物は最下部の1段のみ残存しており、井戸側の最下部のみ曲物を使用した形態か、ないし、水溜部分にのみ曲物を使用した形態である可能性もある。掘り方の平面形は円形で、径80~86cmを計る。やすぼまって下方に向かって移行する。一番深い部分は中央やや西寄りであり、ここに曲物が埋め込まれた形態になっている。この回りには拳大の川原石が置かれ曲物を固定している。深さは50cmである。

曲物は、図面4-203.204として示した2点で、残存状態が良くなく、復元して作図した。両方とも径約39cmで、高さは203が15cm、204が8cmを計る。深い方の203が内方にあり、浅い方の204が内方の曲物の下部を補強する形で設定されていた。また、203は曲物底部が上方に位置する形で設定されていたのに対して、204は曲物底部が下方に位置する形で設定されていた。

出土遺物の内、図示したものは、越前擂鉢1点(図面2-129)、上述の曲物側板2点、箸1点(図面3-211)である。図示した以外では、土師器、須恵器、珠洲、加賀である。

S E 04

素掘り井戸であるが、木辺や石が認められ、一部木組みや石組みで補強されていたと考えられる井戸。S E 01の南側で検出された。

掘り方の形態は、上面形が径170~180cmの円形を示し、底面に向かってやすぼまっていく。底面は約55cmの円形となる。深さは111cmである。確認面より約20cm下方に段が付き方形になる。この部分に方形の木組みが施され、回りを石で固めていた可能性がある。

出土遺物の内、図示したものは、土師器皿1点(図面1-122)、珠洲擂鉢1点(図面1-123)である。図示した以外では、土師器、須恵器、珠洲、青磁である。

S E 05

縦板組無支持井戸。S E 03の南側で検出された。

掘り方の形態は、上面形が隅丸方形で、南北111cm、東西94cmを計る。ほぼ垂直に掘り込んでおり、深さは83cmである。当時地上に設けられていたと考えられる井桁の部分は残存しておらず、井戸側最下部がそのまま水溜の役割りを果たしている。井戸側は板材を縦に打ち込んで方形の木組みを構成している。平面形は台形気味となり、規模は、北壁70cm、東壁65cm、南壁68cm、西壁59cmを計る。板材は、幅7.5~8.0cm、厚さ3~6mm、長さ60cm以上を計る。板材を保持する装置は確認できず、当初よりなかったものと判断し、縦板組無支持井戸とした。板材の多くは内方に倒れ込んでいたが、一部の板材は原位置を保っており、土層の違い等も参考にして、井戸側の形態を確定した。第6図の断面図は、縦板材を想定配置した復元図とした。

出土遺物の内、図示したものは、土師器皿1点(図面1-117)、曲物底板1点(図面4-206)、箸12点(図面3-213.214.216~220.223~227)である。図示した以外では、土師器、須恵器、珠洲である。

S E 06

素掘り井戸。駐車場地区で、S E 07と一部重複して、検出された。掘り方の形態は、円形で、径75~85cmで、深さ45cmである。底面より、拳大の石が検出された。出土遺物は、土師器、瓦質土器、珠洲である。瓦質土器と珠洲は擂鉢である。

S E 07

素掘り井戸。駐車場地区で、S E 06と一部重複して検出された。西側は調査地区外となる。上面形は円形になると推定される。深さ38cmである。底面より、拳大の石が検出された。遺物は出土していない。

2. 土 坑

S K 01

平面形は方形を呈し、規模は、長軸1.95cm、短軸1.05cm以上、深さ21cmを計る。S K 05を切っている。また、S D 01に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器の細片である。

S K 02

平面形は方形を呈し、規模は、長軸2.38cm、短軸84cm以上、深さ26cmを計る。S D 01に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲の細片と天目碗の破片である。

S K 03

平面形は方形を呈し、規模は、長軸2.68cm、短軸72cm以上、深さ25cmを計る。S D 01に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器の細片である。

S K 04

平面形は方形を呈し、規模は、長軸4.26cm、短軸2.62cm、深さ25cmを計る。上部をS D 02に切られている。S D 01と一部重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は、図示した、珠洲壺1点（図面2-126）、加賀壺1点（図面1-130）である。図示した以外では、土師器、須恵器、珠洲と瓦質土器の擂鉢破片である。

S K 05

平面形は橢円形を呈し、規模は、長軸1.28cm以上、短軸11.3cm、深さ15cmを計る。S K 01・S D 01に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器の細片である。

S K 06

平面形は方形を呈し、規模は、長軸3.22cm、短軸2.72cm、深さ48cmを計る。出土遺物は、珠洲の擂鉢破片である。

S K 07

平面形は橢円形？を呈し、80cm以上の規模で、西側は調査地区外となる。また南側はS D 01に

切られている。深さは5cmである。出土遺物は、土師器、須恵器の細片である。

S K08

駐車場地区で検出された土坑である。平面形は不正円形?を呈し、1.10cm以上の規模で、西側は調査地区外となる。深さは40cmである。S D04を切っている。出土遺物は、土師器、珠洲の細片である。

3. 溝

S D01

調査地区の中央部を東西に走る溝。幅1.02~1.34m、深さ8~34cmで、11.5mに亘り検出された。駐車場部分を入れた総延長は17mになる。S K01~03・05・07を切っている。S D02と一部重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物は、図示した土師器2点(図面1-119.121)と土師器、瓦質土器、須恵器、加賀の破片である。

S D02

S D01の南側に位置し、調査地区の中央部を東西に走る溝。幅1.64~1.74m、深さ11~12cmで、7.5mに亘り検出された。西側は調査地区外となる。東側は削平と湧水のため、明確にすることことができなかつた。S E02、S K04の上部を切っている。出土遺物は、図示した珠洲櫛鉢2点、壺1点(図面2-124.125.127)と土師器、瓦質土器、須恵器、珠洲の破片である。

S D03

調査地区的北側で検出された南北に走る溝。幅20~36cm、深さ3~10cmで、5.8mに亘り検出された。北側は調査地区外となる。ピットに切られている。出土遺物は、土師器、須恵器の細片である。

S D04

駐車場地区で検出された溝である。東西に走る小溝で、幅32~46cmで、1.2mに亘り検出された。西側はS K08に切られている。東側は調査地区外である。掘り下げていないので、深さは、不明である。遺物は出土していない。

S D05

駐車場地区で検出された溝である。東西に走る溝で、幅1.32~1.44m、深さ18~24cmで、1.8mに亘り検出された。東側、西側ともに調査地区外となる。掘り下げは一部のみ行った。出土遺物は土師器、須恵器の細片である。

S D06

駐車場地区で検出された溝である。東西に走る小溝で、幅42~64cmで、深さ11~15cmで、1.9mに亘り検出された。東側、西側ともに調査地区外となる。出土遺物は、須恵器の破片である。

III 遺 物

1. 土器類

須恵器

図面1-101~116。奈良・平安時代の須恵器の杯・蓋である。遺構から出土しているものもあるが、混入品である。

中世土師器

図面1-117~122。中世の土師器皿である。ロクロ未使用117~120とロクロ使用の121,122である。117~120は、口縁部が横ナデ、底部がナデである。ロクロ使用のうち、121は底部外面を手持ちヘラ削りしている。122は底部外面が糸切りのままである。これらの土師器はすべて遺構から出土している。出土位置と法量等は以下のとおりである。

117 : S E05, 口径13.8cm, 器高2.3cm残存, 口縁部横ナデ。

118 : S E01, 口径10.0cm, 器高2.4cm, 口縁部横ナデ, 底部ナデ。

119 : S D01, 口径10.2cm, 器高2.0cm残存, 口縁部横ナデ, 底部ナデ。

120 : S E02, 口径8.0cm, 器高2.2cm, 口縁部横ナデ, 底部ナデ。

121 : S D01, 口径9.5cm, 器高1.8cm残存, 口縁部横ナデ, 底部外面ヘラ削り。

122 : S E04, 口径8.0cm, 器高2.0cm, 口縁部横ナデ, 底面は糸切り, ロクロ使用。

珠洲

図面2-123~128。123~125は珠洲の擂鉢である。すべてオロシ目は密である。口縁部が判明する123・124は口端面に櫛目波状文が廻る。126は壺の口縁部で、127,128は、壺の底部である。出土位置と法量等は以下のとおりである。

123 : S E04, 口径37.8cm, 器高15.5cm, 口端面に櫛目波状文が廻る。

124 : S D02, 口径35.8cm, 器高5.2cm残存。口端面に櫛目波状文が廻る。

125 : S D02, 底径11.0cm, 器高4.9cm残存。

126 : S K04, 口径24.4cm, 器高5.7cm残存。

127 : S D02, 底径10.0cm, 器高5.7cm残存。底面は静止糸切り。

128 : 表土, 底径11.0cm, 器高4.9cm残存。底面は無調整。

越前

図面2-129。越前の擂鉢の底部片である。S E03からの出土である。

加賀

図面1-130。加賀の壺の口縁・肩部である。S K04からの出土である。

2. 木製品

漆器椀

図面3-201。内外面とも全体的に黒色の漆が塗られている。内面には赤色で文様を描く。口径8.1cm、器高2.6cm、高台部径5.4cmを計る。S E02出土。

木簡

図面3-202。木簡の一部である。幅2.6~2.8cm、長さ13.7cm残存、厚さ2.5mmを計る。片面に墨書きされている。中世の木簡と考えられるが、文字ははっきりしない。S E02出土。

曲物側板

図面4-203. 204。S E03の井戸側として使われていた曲物の側板2点である。残存状態がよくないので、復元図として示した。

203は、径39cm、高さ15cmに復元できるものである。桿皮綴じは2列綴じであり、前列が5段で、後列は組合せの切目が1箇所確認できた。桿皮綴じはじめを側板の上下縁の外側になるよう復元したが、確実ではない。結合孔は均等には配置されていないようである。側板を円形に曲げるためのケビキは、縦平行線に入り、さらに…部斜平行線に入っている。

204は、径39cm、高さ8cmに復元できるものである。桿皮綴じは2列綴じであり、前列が3段で後列が2段である。桿皮綴じはじめを側板の上下縁の内側になる形態と想定され、側板の上下縁が欠損しているのであろう。結合孔は円周を均等に分ける8箇所である。ケビキは、斜平行線に入っている。

曲物底板

図面4-205~209。曲物の蓋板(底板)ないし、容器の蓋としての使用が想定される円形の板である。出七位置や法量等は以下のとおりである。

205: ピット、復元径16.9cm、厚さ6mm、円孔が3箇所みられる。

206: S E05、復元径11.2cm、厚さ7mm、円孔が2孔1対の形で1箇所みられる。

207: ピット、復元径7.1cm、厚さ6mm。

208: S E01、径21.8~23.0cm、厚さ6mm、そっている。

209: S E01、梢円径で、長径23.3cm、短径17.3cm、厚さ7mm、桿皮綴じの結合孔が付く。

折敷底板

図面3-210。隅丸方形の折敷の底板か?長辺31.7cm、厚さ3mm、桿皮綴じの結合孔は、長辺に4箇所、隅部に1箇所付く形態である。S E02出土。

箸

図面3-211~227。箸状の木製品である。S E04以外の井戸址からの出土品である。

部材

図面5・6の228~233。S E01の井戸側の縦板及び横棟である。

IV 結 語

下佐野遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期頃の遺跡として、一般に知られている遺跡であるが、今回の調査地区は、中世を中心とする。出土遺物は古墳時代から中世後期まで幅広く出土しているが、遺構に伴うものは、すべて中世のものである。古墳時代から平安時代の遺物は、遺構への混入品及び耕地整理等に伴って移動した土層から出土している。このことは、古墳時代から平安時代の遺構も付近に存在していることを示している。

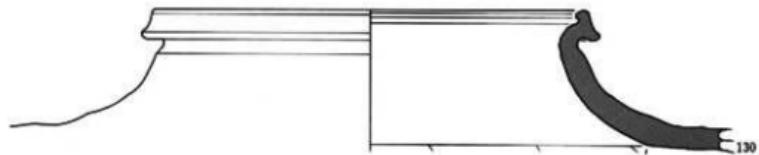
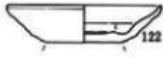
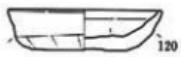
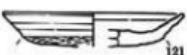
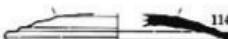
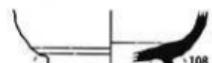
中世の遺物は、土師器や珠洲を中心に瓦質土器（擂鉢）、越前、加賀、輸入青磁、天目を若干含むものである。これらはほぼ14～15世紀のものであり、これより前の12～13世紀頃のものは少ない。遺構は、中世の井戸址を中心としたもので、井戸址は接近していたり、重複しているものもあり、同じ時期にすべて存在していたわけではない。しかし、出土土器類より推定される時期差は少なく、総じて15世紀の所産で、一部16世紀初頭に降る可能性のあるものとしておく。溝も同時代であろう。SK04・06以外の比較的小型の土坑については、やや古くなり、14世紀代に遡るかもしれない。

井戸の型式については、宇野隆夫氏の分類に従って述べてきた。しかし、曲物積上井戸としたSE03については、文字通り曲物を積み上げているのではなく、二重にはなっているが1段である。これは曲物が1段分しか残存しなかったのではなく、当初よりこのような形態であったと理解したい。このようなものが一つのタイプとして類型化できる可能性があると思う。

下佐野遺跡は出土遺物から、弥生時代以来、長期間存在した遺跡であり、遺跡の範囲も広く、当地域の拠点的な大集落と想定されている。今回の調査は、この遺跡の一部分の一つの時代の在り方を幾分なりとも、解明できたと言える。

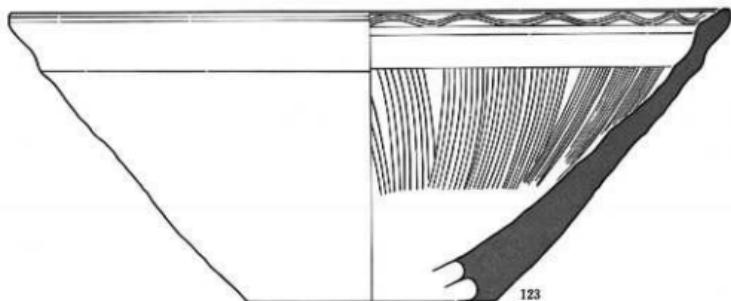
参考文献

- 上野 章 1967 「高岡市下佐野遺跡」『大境』第3号 富山考古学会
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻5号 史学研究会
- 町田章他 1985 『木器集成図録－近畿古代篇』 奈良国立文化財研究所
- 吉岡康暢 1977 「加賀・珠洲」『世界陶磁全集3－日本中世－』 小学館
- 吉岡康暢 1981 「珠洲」『日本やきものの集成4－北陸』 平凡社

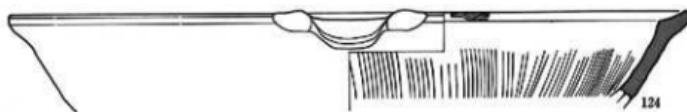


縦器 : 101~116。中世土器 : 117~122。加賀 : 130

図二
遺物実測図
土器類



123



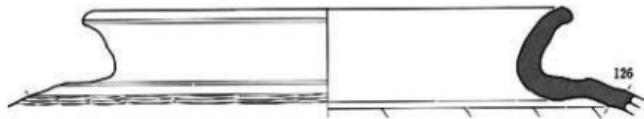
124



125



126



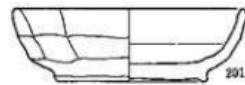
127



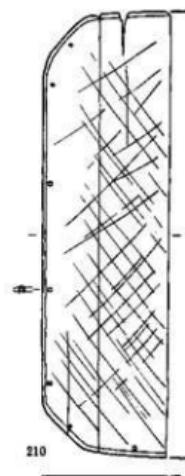
128



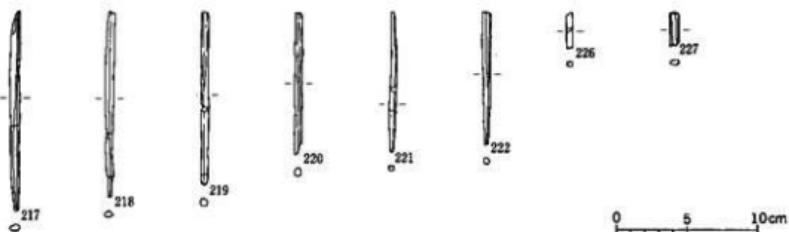
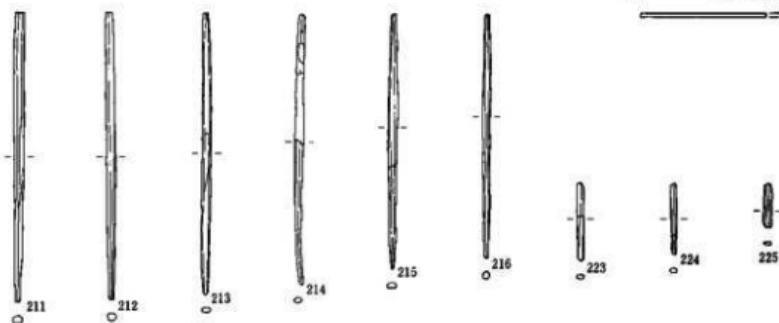
図三 遺物実測図 木製品



0 5cm



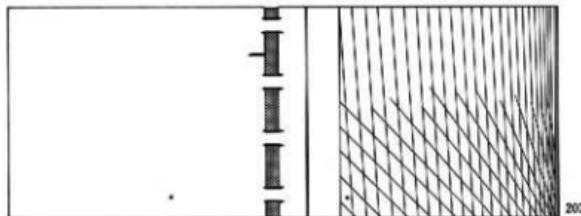
210



0 5 10cm

漆器挽 : 201. 木簡 : 202. 折敷 : 210. 箸 : 211~227

縮尺 1/2, 1/4



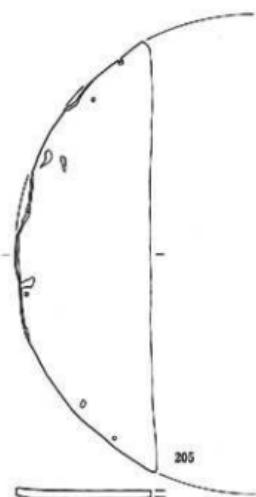
203



204



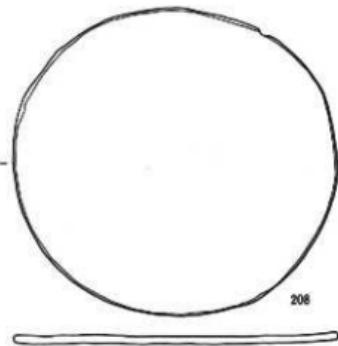
206



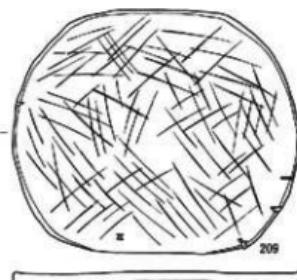
205



207



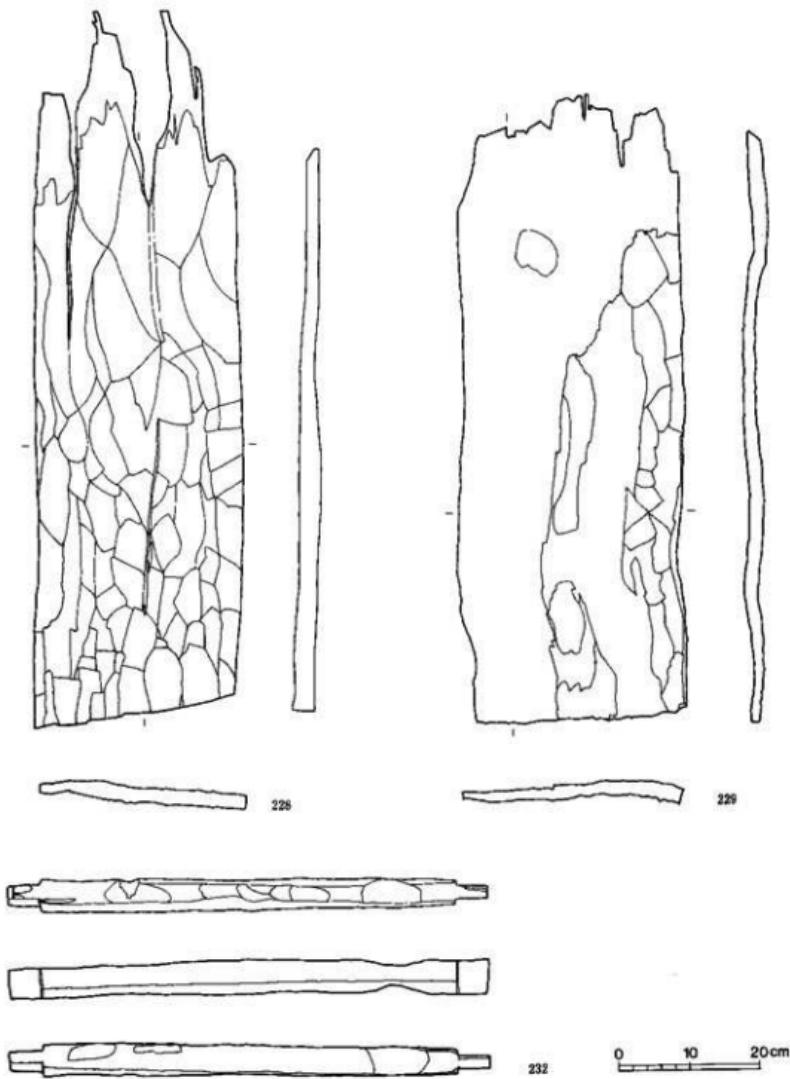
208



209

0 5 10cm

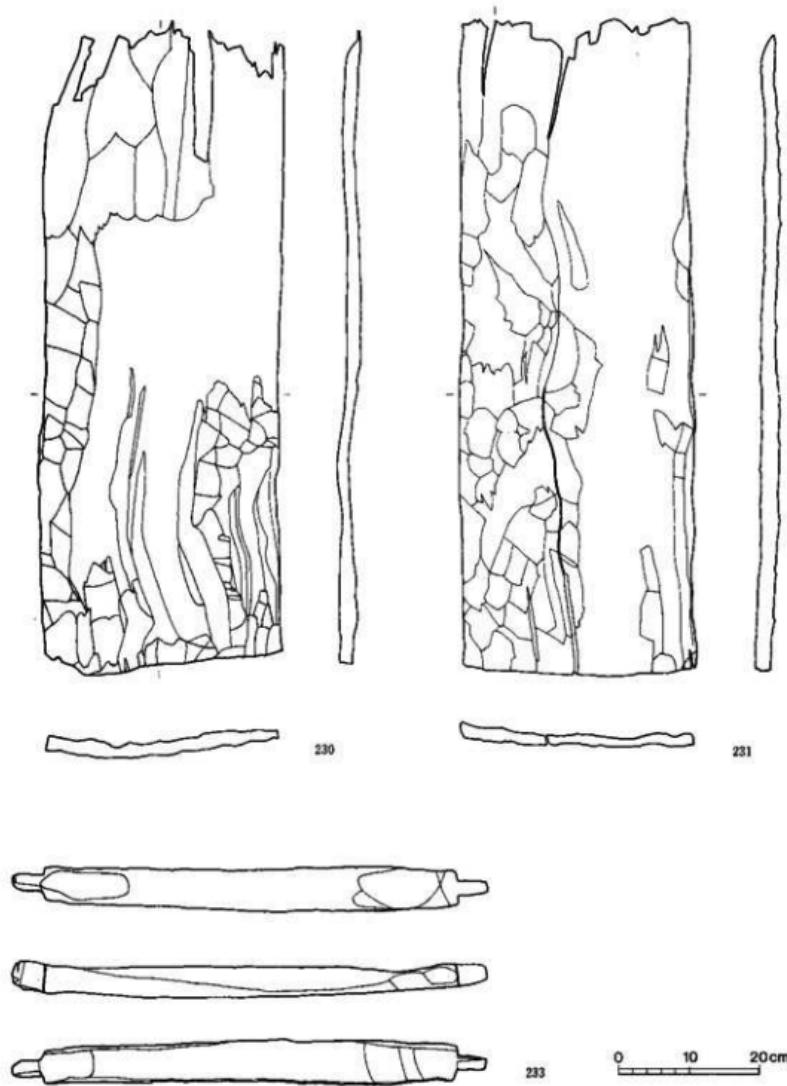
図面五 遺物実測図 木製品



井戸側部材 = 継板 : 228~229, 梁柱 : 232

縮尺 1/8

図面六 遺物実測図 木製品



井戸側部材 = 梁板 ; 230~231, 横桟 ; 233

縮尺 1/8



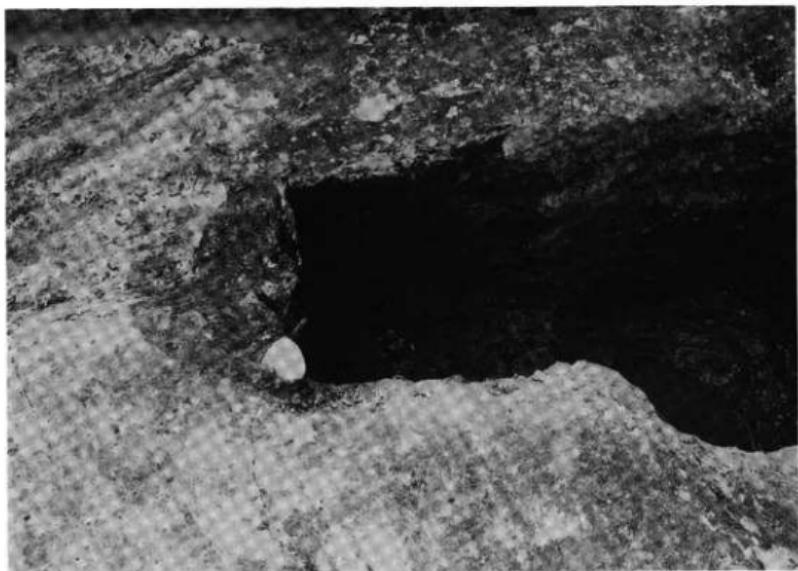
1. 建物地区全景（南西）



2. 建物地区全景（北西）



1. 駐車場地区全景（南西）



2. SE01全景（東）



1. SE01全景（北東）



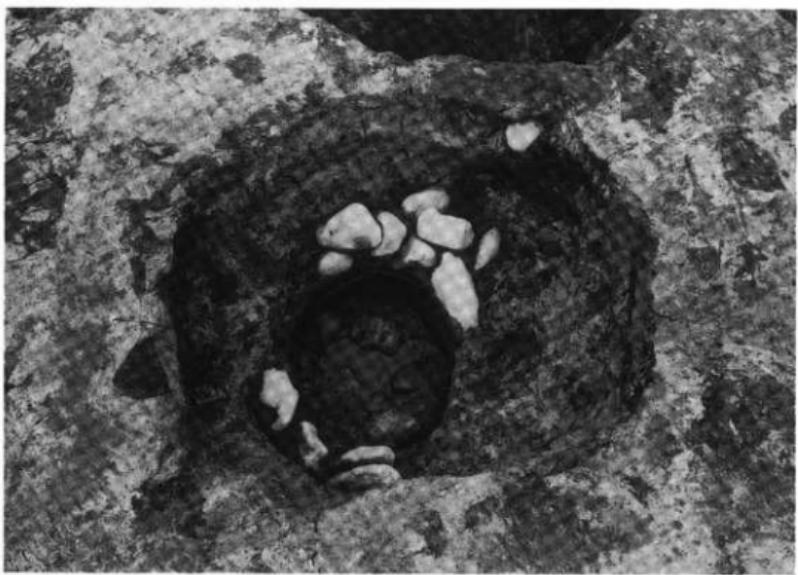
2. SE01全景（北東）



1. SE02全景（南西）



2. SE06·07全景（東）



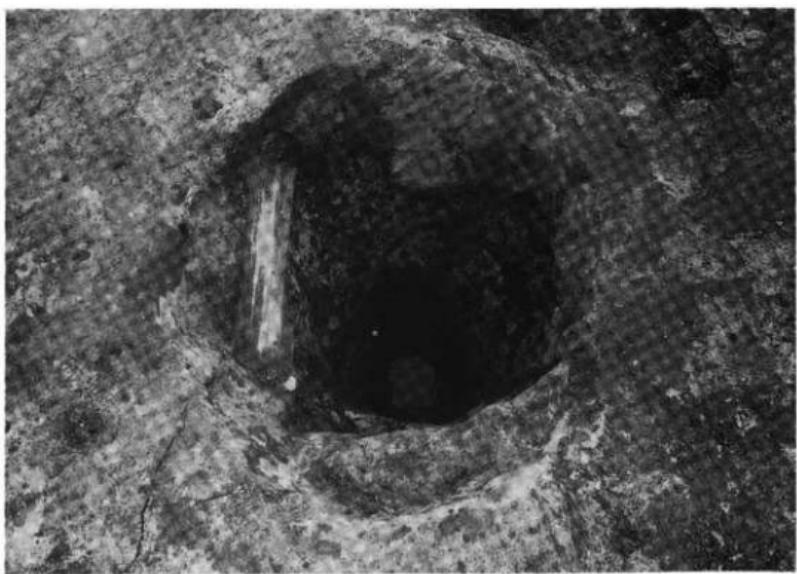
1. SE03全景（南西）



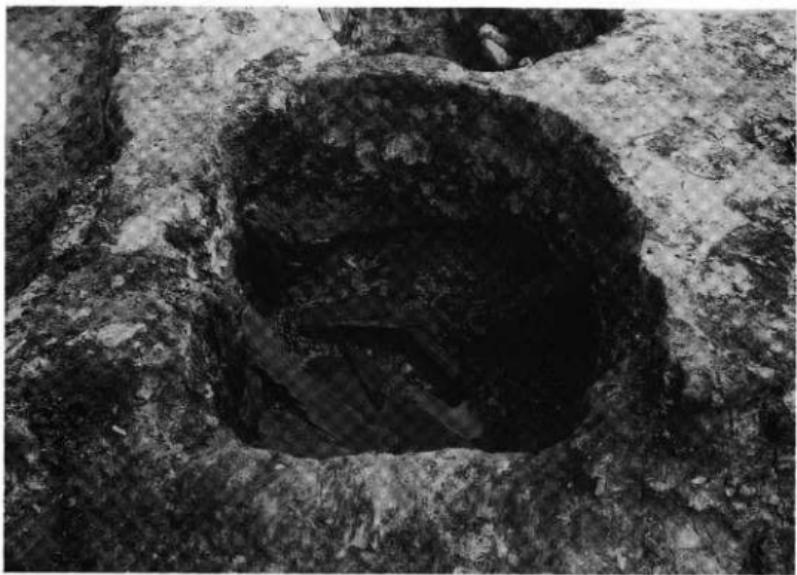
2. SE03全景（南東）



1. SE04全景（西）



2. SE04全景（北東）



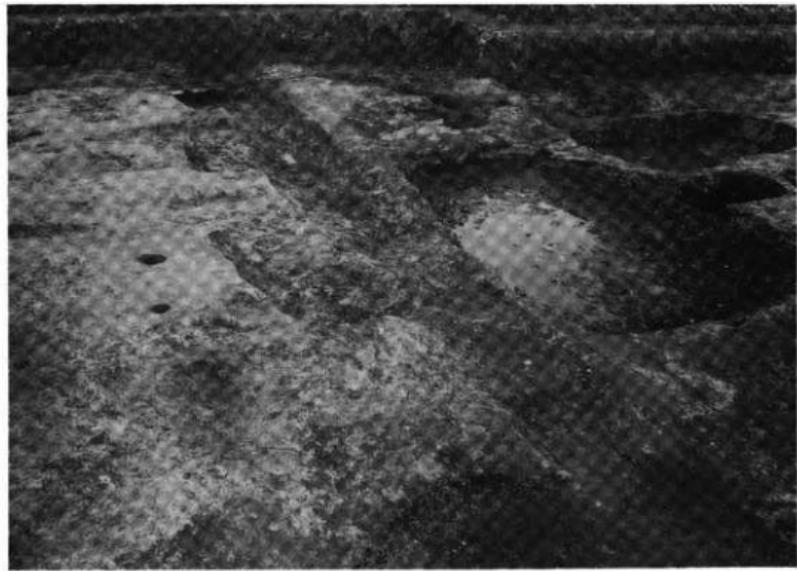
1. S E05全景（南西）



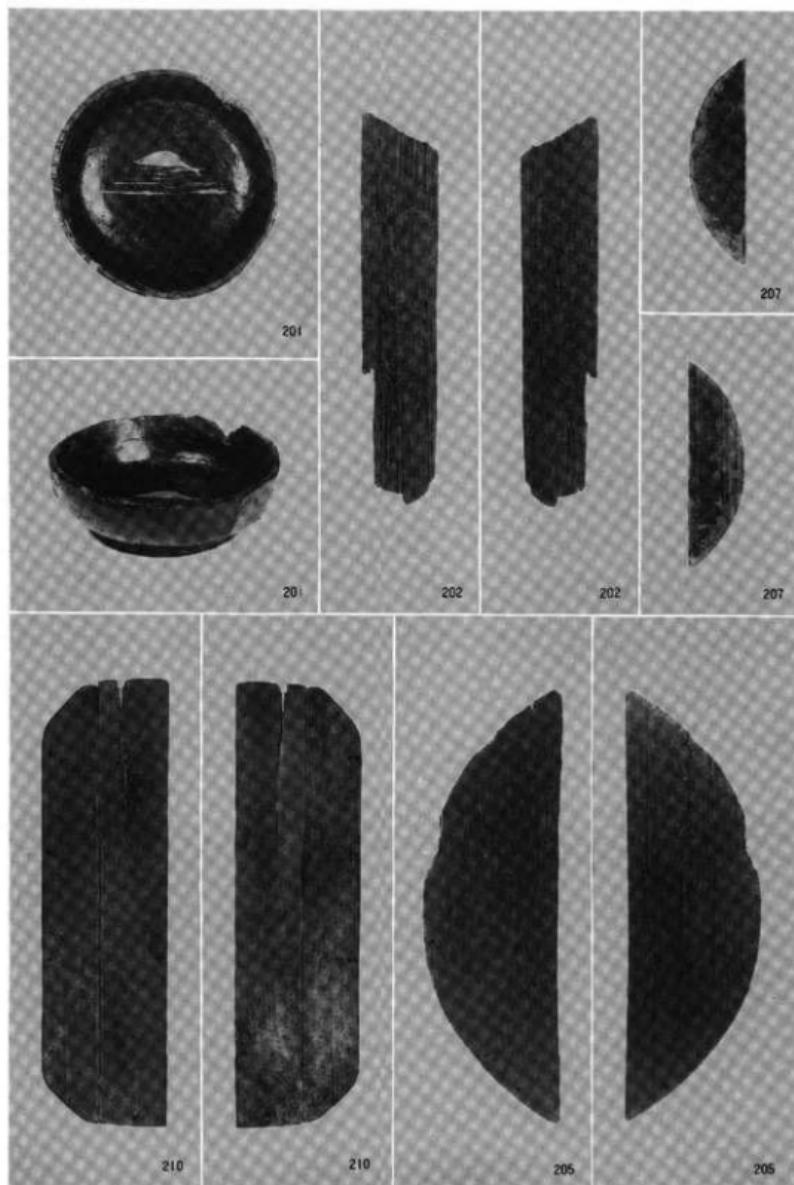
2. S E05全景（北西）



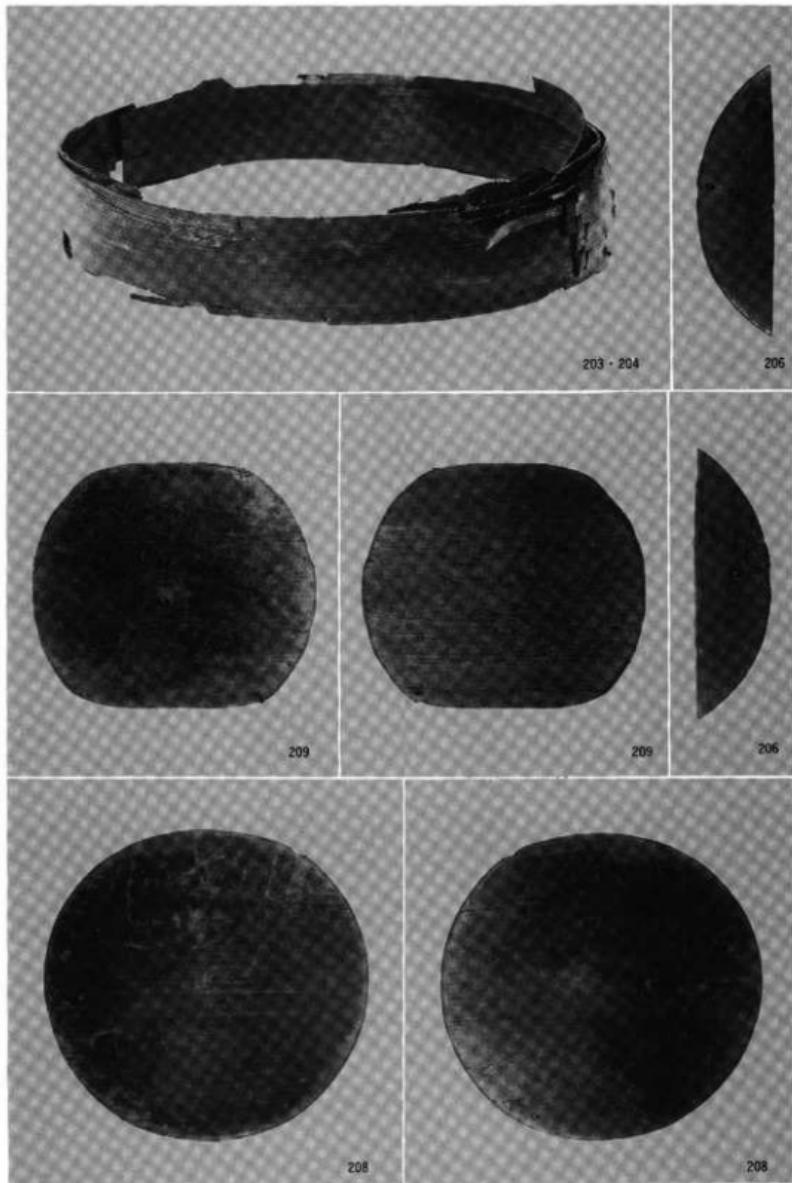
1. SD01全景（南西）



2. SD01全景（北西）



木製品



木製品



228



228



232



232



229



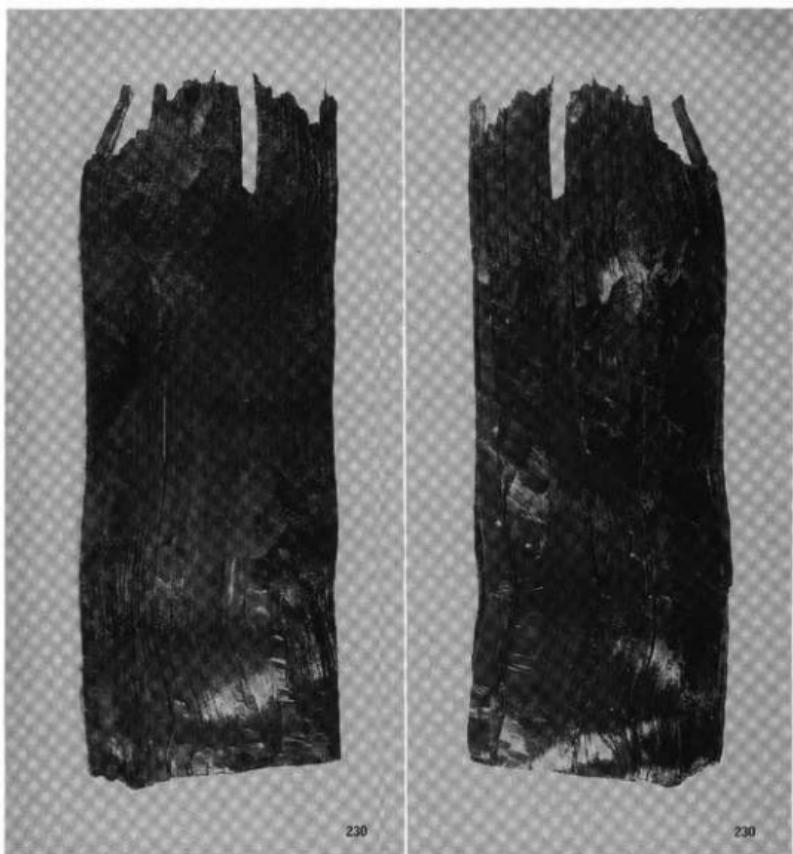
230



231



232



230

230



233

233



231



231



233



233

高岡市埋蔵文化財調査概報第17冊

下佐野遺跡調査概報Ⅰ

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7-50

1992年3月31日

印刷所 小間印刷株式会社

富山県高岡市利草町3
